

その時 III

これにはお前の骨が入つてゐるのだ
てのひらにかくれさうな白い壺
かはいい壺
こんな夜ふけになつてから一つの壺をとり出す
窓のすき間から
さつきから 時々 花のやうに
雪が舞い込んでゐる
外ではそいつがさらさらと音たててゐる
明るい電気に照らされたせまい室で
僕はこたつにあたりながら
蓋を取る
僕はふと耳をすます
銘仙のこたつ布団の模様の上に
白い粉が散る
僕は人間の骨といふものに見入る
太つたお前を支へてゐた
脆い少し黒ずんだ灰を
指でつまんでみたりして
僕に感傷の心が湧く
一冊のすぐれた詩集を閉ぢるやうに
かはいい壺に蓋をする
それを読み終つたかのやうに
僕はためいきをつく
がうがうと音たてて
ああ 吹雪